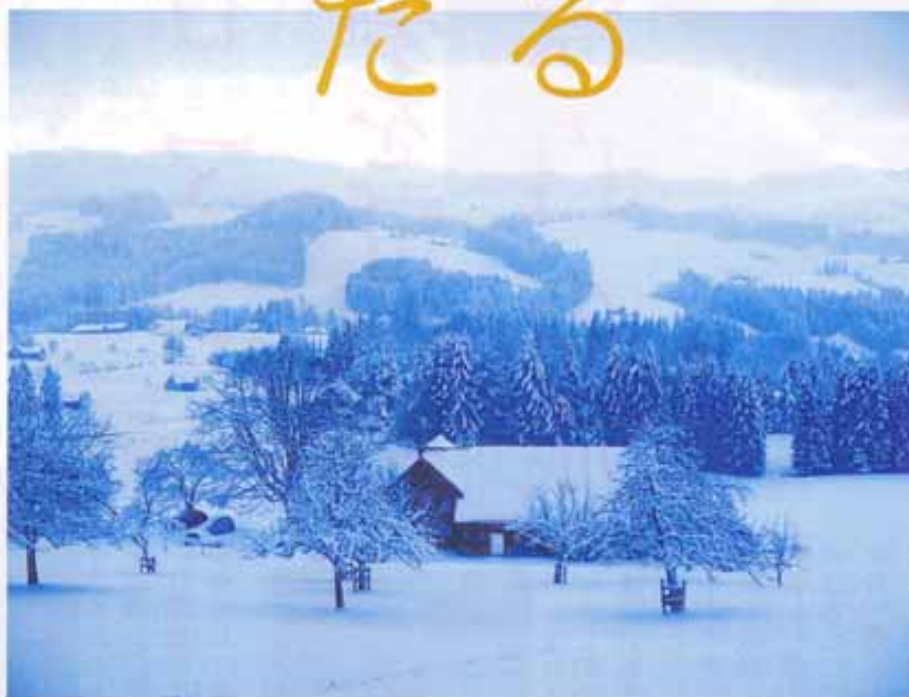
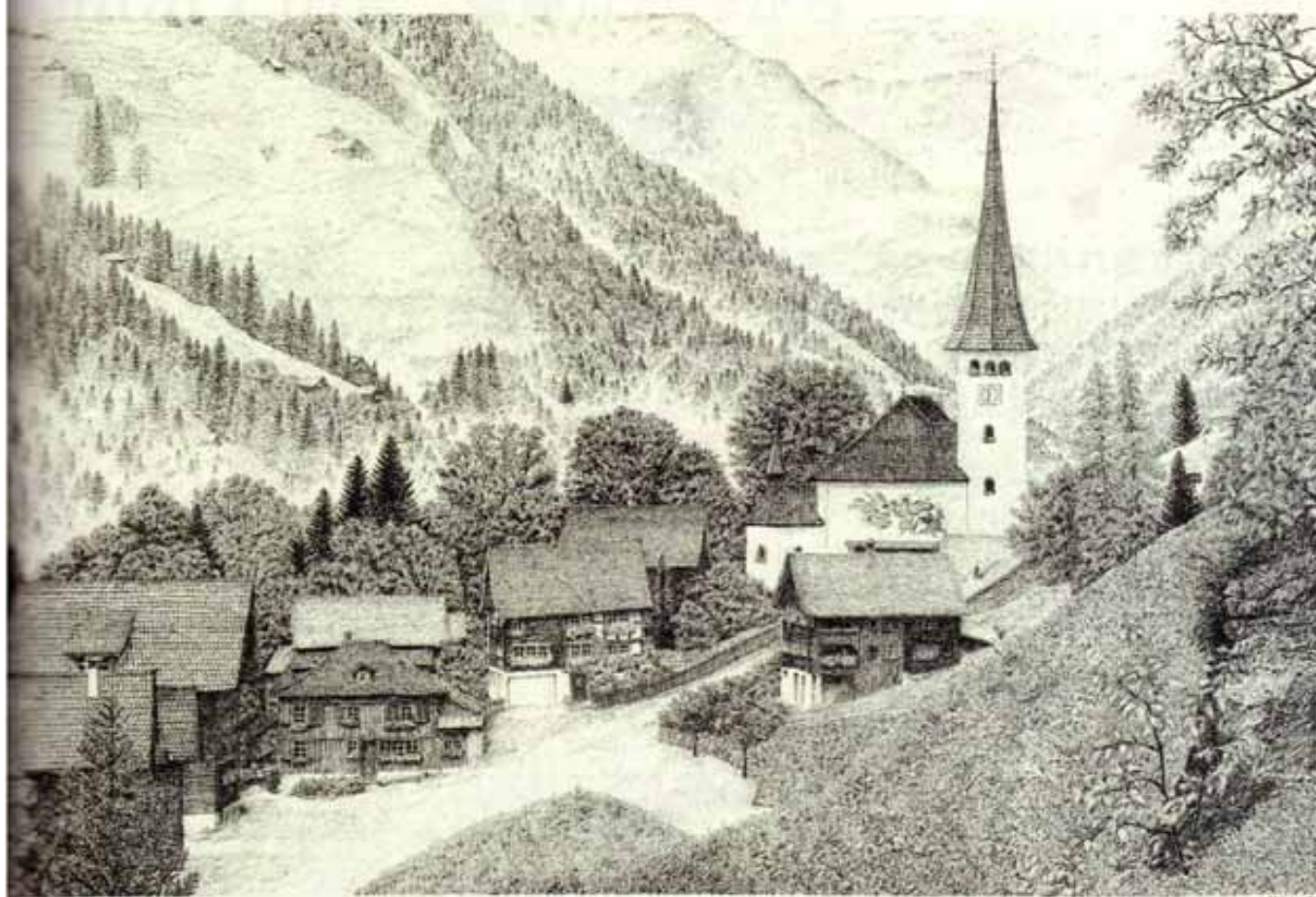


❄️❄️❄️  
スイスの村の障がい者施設で働くアートセラピスト  
備えられている  
生き方があった

松林幸二郎さん



雪をかぶった林、風雪に耐えた古い木造の民家、木の梁や板壁、凍りついた川、ゆるやかな起伏に富む丘……ここはスイス東部の村トイフェン。



KOJI 特

# ロマンと 夢を託した 漂白の旅

この村の重度心身障がい者施設で働く松林幸二郎さん（五十八歳）は、いつも、この地方独特の古い家並と、自然との調和に魅了されるという。

スイスに永住して二十七年。奥さんのハイデイさん、三人の子どもたちとともに、古い農家を改造した家屋で暮らす。

作業療法士として働く施設で、昼休みに、窓の外の雪景色をス



ケッチし始めたことから、さまざまな作品が生まれるようになった。

やがてガラス板に銀線で精密に描く版画（フィリグリー）と出合い、彼の繊細で静かな風景画はさらに深まりを見せるようになった。

## 生きる意味を探し求めて

三十数年前、大学を出て司法書士事務所働いていた松林さんは、仕事を辞め、二十五歳で



## 50の国々を放浪

シベリヤ鉄道に乗り込んだ。芹沢光治良せりざくみちひらの文学を通して西欧にあこがれ、片道切符とわずかな旅費を懐に、リュック一つで旅立った。一九七一年のことだ。「自分の性格は到底会社向きでなく、とって、独立するようがない人間が社会で生きていけるのか。いったい人は何のために生きるのか」と、松林青年は出口を見いだせず苦しんでいた。そんな自分がロマンと夢を託せるのは漂泊の旅のみであると信じて、確固とした目的や将来への青写真も持たないまま、



納屋を改造した自宅のアトリエで制作をする松林さん。



### 運命の女性との出会い

放浪の旅も三年目に入るところ、松林さんはもつと英語力をつけようと、イギリス・エクセター市の語学学校で数カ月間学ぶ。

異国へと旅立ったのだ。当初一年の予定が、三年になり、欧州、北米、南米、中東、アフリカと五十に及ぶ国々を放浪した。そのなかでとりわけ興味をそそられたのは、それぞれの国で、さまざまな形で人生を送る人々の姿だった。旅費と生活費はニューヨークで皿洗いやコックをして稼いだ。当時はまだドルが強く、三カ月働けば、その貯金で九カ月旅ができた。旅の体験は、青年の人生観の形成を助けた。しかし、「やがて旅そのものに魅了され、帰国後の「現実」と対峙する勇気を失っていった」と、彼は当時を振り返る。



# 「私の人生の一大転機でした。」



未来の妻にあてて、毎週書いた手紙の封筒には自筆のスケッチが。



自宅の前で3人の娘たちと。右から2番目が妻ハイディさん。

そこにドイツ語圏スイスから来ている学生がいた。ことばを交わすうちに、松林さんはその人の生き方に深い感銘を受ける。高収入が約束されている高級ホテルの秘書の仕事捨て、社会的評価も低い、障がい者施設で働く道を選択した女性だった。

その決意の裏には、真実、助けを必要とする人々のために、自己を神の「土の器」としてささげるというキリスト教の強靱で無私の精神があった。「そのような崇高な生き方があることも、その源泉に

ある信仰も、福祉の意味や障がい者の実情についても、すべてが初めて耳にすることはかりでした」。日本を出る前に幾度か聖書を手にしたことはあったが、このスイス人女性の信仰と精神が、松林青年に著しい影響を与えた。

「それまでの私は、自分の道を自分の力で切り開こうとして、自分の無力に苦しんできました。しかし、神と人のために働いてこそ、生きる意味があり、そのために人間は創られ生かされているのだという精神に出合った時が、私の人生の一大転機でした。それまでの自己本位の生き方を、猛反省させられました」

その後、松林さんは米国に戻り、彼女はスイスの施設職員養成学校に入学。しかし彼は、彼女のことを忘れなかった。それから五年の間、旅先から、米国から、祖国から、週三回、彼女に手紙を書き続けた。そして、その封筒をスケッチで飾った。(つまり、この文通が、松林さんに絵筆を執らせるきっかけを作ったとも言える)

一九七四年、日本に戻った松林さんは、母親を支えるために郷里の三重県でレストランを経



松林さんが30年近く勤めているハイム・エペネゼル。1769年に建てられた木造の美しい建物に、30人の障がい者が暮らす。職員は38名。5階の全フロアが工房になっていて、彼がクリエイティブ・セラピーと名づけるさまざまな手工芸や音楽を楽しむ療法が、毎日グループごとで行われる。

■施設の工房でつくった手工芸品■



色鮮やかなキャンドル



手すき紙で作るカード



木製のオモチャ



松林さんの下絵をもとに制作するタペストリー。4人がかりで2年かかる大作だが、できあがった時のみんなの喜びはひとしお。ほかにも刺しゅう、織物、陶器、藤細工も。2年に一度のパザールや施設の作品を売るショップで、高い評価を受けている。

営するかたわら、福祉や障がい児教育について大学で学んだ。このころ三浦綾子の小説と出会って神の愛を知り、教会に行き、クリスチャンの友人が与えられた。経済的な困難を幾度かくりながら、それらを克服しつつ生き抜くことができた。彼女からの手紙が彼を励ましたことは言うまでもない。

異国で家庭を築く不安

三年後、松林さんは旅人としてではなく、彼女と結婚しスイスに永住するために、今度は一人の社会人、日本人キリスト者として、ヨーロッパに向かった。両家の祝福に包まれて結婚。しかし同時に大きな不安が襲ってきた。ドイツ語は全くできない、特殊技能は皆無。家族を養う責任を負って、就職は不可能に近く、心は深く沈んでいった。その中で折った。「神よ、あなた

の思し召しなら、私のような者でも、神と人に奉仕できる職場でお使いください」

やがて、アッペンツェラー州トイフェン村の重度心身障がい者施設で働くことが決まった。祈りは聞かれていたのだ。不安に駆られていた自分の、神に対する信頼がいかに小さいものであるかを知らされ、恥じ入った。

たとえ小さな能力であっても

それから二十数年、アート・セラピストとして、今では責任ある仕事を任されている。障がいを負った人々に手工芸や音楽を通して自分は何ができて、どんな喜びを与えられるか、試行錯誤を繰り返しながら楽しく働く日々である。たとい持てるものはわずかでも、神から与えられた才能を生かしながら働けるのは幸い、と松林さんは語る。

神は一人ひとりに、いちばん良いものを準備してくださる。その神に信頼しゆだねるなら、「その時」が来れば、必ず道を開いてくださる。そう確信する松林さんの好きな聖書のことば。「主の山に備えあり」(旧約聖書・創世記二章一四節)

スイスの山や森、雪をかぶった民家などを描く松林さんの美しい版画集のプレゼントがあります。詳しくは巻末p160を。



